

なんか大蛇に転生して
討たれたら英靈になつ
た

朱色の羊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死んであの頭が八つの蛇になつた男が英靈になる話

※R3・9／10読み切りから連載化しました

それに伴い活動報告にて本作のアイデア募集・登場サーヴァント募集を開始しまし
た、どんなものでも結構ですので遠慮なく書き込んでください

目次

番外編

第三・五節『陣中会議』

31

なんか大蛇に転生して討たれたら英靈

になつた

1

なんか英靈になつたら暇だから予想し

てみた

7

幕間『大蛇の娘達』&お知らせ

10

永久輪廻神域・出雲

プロローグ

――――――――――――――――――――――

第一節『日本神話の地にて』

――

第二節『集落での出会い』

――

第三節『合流、そして現状』

――

26

23

20

15

34

番外編『バレンタインシナリオ』

なんか大蛇に転生して討たれたら英靈になつた

トラックに轢かれ氣が付いたら蛇になつていた：

何言つてるか分かんないと思うけど俺にも分からん、ただ言えるのはただの蛇じや無
いっぽい

だつて頭が八つあるんだもん、それに加えて体はそちらの木々ぐらいあるもん

うん、これさ…

「八岐大蛇じやねえかっ!!」

そう俺は：日本の神話たる古事記、その中でも指折りの大邪神である八岐大蛇になつ
ていたのだった：

「うーん…転生物は好きだつたけど自分がなるとかさあ：

しかも勇者でも何でも無くて八岐大蛇じやん、むしろ人類に害を成す側じやん
やだよお俺、スサノオと戦うのとか…」

その場で項垂れとぐろを巻きながらあれこれ考える俺もとい八岐大蛇

その動きに驚いた鹿さんとか兔さんが逃げ惑つてるけど今はそんなの気にしてる余

裕は正直今は無い…

「んー…もうなつちやつたからには仕方ないかなあ？」

人間に害を成す事が無いようにすれば大丈夫だろうし

そう結論を出して俺は取り敢えず移動を始めた、目指すは人気の無さそうな山中

そこでひつそり暮らすことにしてようと思う

はい、ダメでした！

全然静かにひつそり暮らすことなんて出来なかつたよ

だつて移住先の山にいた妖怪共が俺のこと祭り上げてくるんだもん！

そりやそりだよ、俺八岐大蛇だもんね！

曲がりなりにも水神とか山神に数えられる大邪神だもんな！

いや別に祭られるだけなら良いんだよ、仮にも神に転生したからにはそう言う扱いは

嬉しいしね

けど問題がある、それも結構な…

「八岐大蛇様、本日の貢ぎ物にございまする！」

そう、部下の妖怪共がやたら貢ぎ物を持ってくるんだよね

それだけなら良いんだけど明らかに周辺の人里を襲つて強奪してるんだよ

しかも此奴ら無駄に俺への忠誠心がデカいから襲撃の度に「八岐大蛇様のために！」とか叫んでるし、何度言つても止めてくれないし！

最近では近隣の人里の人から生け贋を捧げるから襲わないでとか言われたしね、出来るならそうしたいけどこればかりは皆言うことを聞かないのよ！

これもう無理だよ、完全に人類の敵認定待つたなし！

絶対俺、スサノオに討ち取られるよね！

「如何致した八岐大蛇様、お顔色が優れないようですが…」

「ああ、何でも無い…もう下がつて良い」

まあ良いこともあつた

まず一つ目は人型の体を手に入れたこと

これで山を越すくらいまで大きくなつた体を隠して動きやすくなつた、もしもスサノオと戦つてもスキを突いて逃げ出せると思う

二つ目は神ツボい口調が身についた

まあこれは妖怪共に祭り上げられたせいで身に付けるしか無かつたんだけどね取り敢えず…もう腹を括つてスサノオを待つしか無いな、あわよくば返り討ちに…

返り討ちにしてやろうとか思つてた時期が俺にもありました！

あれから数年、ついにスサノオとの対決の時…もう完膚無きまでに負けたよ
史実通りに八塙折ノ酒に毒を盛られたね、知つてたから我慢できるかと思つたんだけ
ど…

うん、無理だつたね！

八岐大蛇になつたせいで大酒飲みになつたからか美味しそうなお酒を前に我慢出来
なかつた！

今は満身創痍のまま倒されたように見せかけて逃げ伸びた、三日三晩歩いたし多分だ
けど近江：滋賀辺りかな？

なんとか人里にたどり着いて匿つてもらつた、代わりにそこを治める豪族の娘さんに
求婚されたけどね

美人だし特に不満は無い、嫁さんのお腹には子供もいるしね
でも俺の記憶が正しいなら、生まれてくる子は…

予想通り…生まれてきた子は鬼だつた、しかも邪神である八岐大蛇の神としての力を
色濃く受け継いでいた

人ならざる者の力を持ち、人ならざる者として生まれたからには人里には置いておけ
ない…

そして、その人ならざる力の大本になつた俺も…もう人里には戻れない

「バーめん…バーめんなあ…」

俺が、俺が邪神であるばかりに…！」

襲い掛かる暴徒から我が子を守り連れ出したは良いものの、鬼であるこの子を連れて人里には行けない

そんなわけで俺は我が子を抱えたまま山に籠もることにした、幸い此処らの山は実りも獸も多く生活に困ることは無いはずだ
このままこの子が独り立ちするまで育てようと思う…

そしてあの子が生まれてから数十年、あの子は一人の鬼として、そして八岐大蛇の分御魂として立派に育つた

そして俺は、体内に残つていた八塙折の酒の毒が回り…ついに倒れあつという間に死んでしまつた、悪名を轟かせた八岐大蛇にしては呆気ない最期だつたけど満足だ
それよりも驚いたのは：死後世界に招かれた事だね、簡単に言えば俺は英靈になつちやつた

ココつて F a t e 時空だつたんだねー…

と言ふことはまた我が子に会えるつて事だよな、あの子に…

6 なんか大蛇に転生して討たれたら英霊になった

我が愛娘である伊吹童子…後の酒呑童子に！
ああ：敵にしろ味方にしろ、再会が楽しみだ…！

なんか英靈になつたら暇だから予想してみた

はいどーもー！

前回愛娘を育ててたら毒が回つてポツクリ逝つちやたら英靈にされた八岐大蛇こと
ヤマちゃんでーす！

うん、このテンション虚しいから止めよ

まあそんなこんなで俺が八岐大蛇として二度目の生を終え、英靈として『座』に記録されちゃってから現世では多分：数千年くらい？

いや！…めつちや暇だね！

いくら時間つて概念が無いにしろ召喚されるまでは待機だもんね！

しかしここには他に暇を潰せる物も無いので、もはや顔？馴染みの『座』さんに話しかけて暇つぶしまーす！

『座とやら……に良い余興となる物は無いのか?』

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

『なんだ、つまらぬものよな…余は暇で暇でくたばりそうだが?』

卷之三

『余のくらすだと…?』

そんなものの邪神に決まつていよう!』

そんなんクラスは無いし、作りません。

『なんだ、つまらぬな…まあ良いわ、それなりに暇も紛れた』

それは何よりです。

うんうん、やつぱり『座』さんと話すと暇が紛れるね、だつてめつちや可愛らしい声してんだもん!

雄^男顔は知らないけど声だけで分かる、『座』さんはめつちや美人だろうね!

としてこれは放つておけない、絶対口説き落として見せる!

…まあ茶番はさておいて、『座』さん面白い事言つてたね?

俺のクラスねえ…確かに予想してみるのも面白そうではあるか…な?

と言うわけでヤマちゃんのクラス予想大会ー!

…うん、やつぱ独りの時にこのテンションは結構くるし虚しいわ

まあ細かい事はさて置き…

候補その①はズバリ『劍士』!

セイバー

俺自身は使わなかつたけど天叢雲剣…もとい草薙剣をその身に宿してたからね、多分

あめのむらくも

八岐大蛇の神威の1つとしてイケる気がしなくもない！

候補その②はまあ『狂戦士』だろうな

俺自ら求めてた訳じや無いけど毎年生贊を捧げられるつて中々に狂ってるよね、まあ

俺が求めてた訳じや無いけど！

候補その③は『復讐者』だな、言わずもがなスサノオへの怒りが根拠だ

俺が死ぬ原因を作つたアイツへの怒りや報復心は正直捨てきれ無い

アイツを倒せるなら喜んでこの身を復讐の炎で焼き焦がそう！

：とまあ色々考えて來たけど正直分からん、どれもあり得そうで違いそうだね

というよりも1つに限らず複数クラス獲得の可能性も無くは…無さそうだし…
…ま、召喚されるまでのお楽しみにしどくかあ！

幕間『大蛇の娘達』&お知らせ

特に事故や事件が起きたり新たな特異点が見つかったりする事も無く平和が続くとある日のカルデア

その食堂の隅に3人の人影があつた

「うち等の話が聞きたい？」

「いきなりどうしたの、頭でも打つたかしら？」

2人で酒盛りを真っ昼間からしていた所にやつてきた自分達のマスターこと藤丸立花の言葉に首を傾げ聞き返す酒？童子と伊吹童子

「打つてないよ、ただふと…自分もマスターならサーヴァント達のことをもつと知りたいなと思つてさ」

「なるほどなあ、そやけどうち等の話なんてそう大しておもうあらへんよ？」

自分達サーヴァントに真っ直ぐ馬鹿正直に向き合い踏み込んでくる

そんな立花の姿に感心と好意を覚えながら二人は揃つて盃を傾け注いだお酒を飲み

込んだ

それでもサーヴァント達のことを仲間と考え、もつと知りたいと思つて立花は引

き下がらずに続けた

「どんな事でも良いんだ、例えば：なんでお酒が好きなのかとかさ」

「あら、そんなこと知りたいのお？」

「うん、まるで限界なんて無いみたいに飲むからさ

いわゆる：うわばみ？だなあつていつも思つてるんだ」

その言葉を聞いた瞬間、酒？童子と伊吹童子は吹き出し笑い出してしまつた
ただ伊吹童子に問われた事に答えただけである立花が呆然としていると笑いすぎて
目尻に浮かんだ涙を拭いつつ酒？童子が口を開いた

「はー…旦那はんつたらいけずやわあ

好きなもん、いっぱい飲みたいのは当たり前やろ？

そやけど、うち等がうわばみつて言うんは上手いこと言うたなあ？」

「え、うわばみつて大酒飲みつて意味じやないの？」

「そうねえ、せつかくだしソレについて話してあげましょうか

貴方もそれで良いわよね？」

「ああ、それで構へんよ」

うわばみがどうこう言われ立花は首を傾げつつ聞き返す、するとそれを見ていた伊吹
童子が口を開き酒？童子に同意を求めると酒？童子も快く快諾した

それを聞き未だよく分かつていらない立花は話を進めるために切り出した

「えつと…それでどういう事なの?」

「えつとねー…まず**蟒蛇**^{うわばみ}って貴方が言つてた大酒飲みつて言うのともう一つ意味があるのね?」

それがね…『大蛇』つて意味なのよ」

「へー…そうだつたんだ、その意味が2人に関係あるの?」

「大いになあ、旦那はんはこの子のえくすとらあたつく覚えてはる?」

ニマニマ笑いつつお酒を飲む酒?童子に質問された立花は思い出しながら答えた
「えつと…あの雲の合間から大きな蛇を呼ぶ奴だよね、あれがどうしたの?」

「あの蛇なあ…うち等のおどうなんよ

あれの血を引いてるうち等にうわばみつてのは言い得て妙やろ?」

「ええつあれが!..

つて言うか、2人のお父さんつて…2人は姉妹なの!」

「なあに、知らなかつたの?」

まあ…姉妹つて言うのも違うと言えば違うんだけどさ」

「知らなかつたよ!」

ただなんか似てるなー…位にしか思つて無かつた…」

とんとん拍子に明かされた事実に驚き項垂れる立花、その様子を楽しそうに見ながらまたお酒を飲んだ2人

そんな2人になんとか落ち着いた立花は話しかけた

「今伊吹童子が姉妹って言うのも違うって言つてたけどあれは?」

「そうねえ: 私に最初会つた時の姿覚えてる?」

「あの下半身が蛇だつた時の?」

もちろん覚えてるけど…あの姿に秘密があるの?」

「まあ分かると思うんだけどあの下半身つてパパから受け継いだ神様の力の象徴な訳じやない?」

父親があの大きな蛇である、そう聞いた立花はそうなのだろうとコクコク頷きつつ続きを求めた

「で、脱皮して神様として1ランク上な今の私になつた訳だけど…

「脱皮する時に神様として力を封じて鬼になつた私もいたわけ」

「えつと…もしかしてそれが?」

嫌な予感を感じつつ、ポーズを取り体を見せる伊吹童子から酒?童子に顔を向けた立花、その視線の先で酒?童子は傾けていた盃を降ろし――

「その通り、それがうちなんよ

だからうちらは姉妹つて言うよりは同じ人物の別側面つて言うのが正しいやろなあ」「やつぱりっ……」

——また、衝撃的な事を言うのだった

「この短時間で驚いてばかりだなあ……

いつか俺も会えたりするかな？」

もはや諦めたように事実を受け入れつつ、2人の親であるあの大蛇にちゃんと会つてみたいと感じ聞いてみる立花

すると2人は少し考え込み——

「せやねえ、アイツも邪神とは言え腐つても神靈やし……旦那はんならそのうち会えるんとちやう？」

「敵味方いぢれにせよ、パパが出てくるなんて相当口クでもない事態だろうけどね

それで良いなら好きにすると良いわ、案外あなたならすぐ気に入られるんじやない？」

「……そつか、ありがとう」

——そう微笑みながら答えた2人に立花も微笑み返し礼を言うとその場を後にす
るのだった

永久輪廻神域・出雲 プロローグ

日々サーヴァント同士の喧嘩こそあるものの、特に大きな事故や事件が起きたりする事も無く平和が続くとある日のカルデア

そんなカルデア内にて突如として警

特異点発見の知らせ

報が鳴り響いた

それを聞き即座に司令部へと急行したカルデアのマスター藤丸立花とデミサーヴァントのマシュー・キリエライト

発生した特異点の修復のため急行してきた2人にカルデアの技術顧問レオナルド・

ダ・ヴィンチが話しかけてきた

「来てくれたね2人とも、さつそく聞くけど…準備は？」

「もちろんいいつでも良いよ」

「私もいつでも出動できます！」

ダヴィンチちゃん、今回の特異点の詳細は？」

ダヴィンチちゃんの問い合わせる気十分に答えた2人

それと共にマシューが今回の特異点について尋ねるとダヴィンチちゃんは額き口を開

いた

「今回特異点が発生したのは3世紀頃の日本、そこに大規模な特異点が発生した」

「大規模な：特異点」

「それで、その：特異点の詳細は？」

いつも唐突に発生する微小な特異点ではない、大規模な特異点という言葉に緊張した顔を見せる立花とマシュー

しかしレイシフトする自分達が気圧されてでどうすると気合いを入れ直すと特異点の詳細は分からぬいか問い合わせるも――

「残念ながらそう詳しい事は分からなかつた

かろうじて分かつたのは今回の特異点が大規模な物である事と：
特異点の反応を解析にかけた結果、恐らくだが：神靈の類がいる可能性が高いことだね」

「神靈：神話に語られる存在が：いる」

――そう大した情報は得られず、かろうじて神靈がいる可能性が高いと言う事だつた
そしてその話を聞き今までの特異点で出会つたり仲間としてカルデアにいる神靈達
を思い浮かべ、その強大さにいつものレイシフト以上に緊張した顔つきになる2人

そんな2人を励ますようにダヴィンチちゃんは付け加えた

「まあまあ、まだその神靈が敵だと決まつた訳じやないんだし！」「フラグ×1」

神靈とは言つても低位な相手かもしれないでしょ？」「フラグ×2」

それに、もしかしたら旅の過程によつては会う事も無いかも知れないんだしさ！」「フ

ラグ×3」

2人はいつも通りに特異点修復してくれれば良いよ！」

「そう…ですね、どちらにせよ私達がやることに変わりはありません！」

「ありがとうダヴィンチちゃん、おかげで元気出た！」

「それなら良かつた」

無事に緊張を解し元の調子を取り戻し礼を言う2人に微笑みかけるダヴィンチ

そして元の真面目な顔に戻ると2人に問い合わせた

「さて…それじゃあ聞こうか、2人とも準備は？」

「いつでも大丈夫！」

「先輩：もといマスターと同じく、いつでも行けます！」

ダヴィンチはその言葉に満足そうに満足そうに頷くと2人分のレイシフト用コフィンを準備した

2人はそこに入ると特異点修復のため、レイシフトしていくのだった

「…来たか」

とある山奥に建てられた一棟の神社、その参道を跨ぐ鳥居の上にその男はいた

白く長い髪を赤い髪飾りで顔の両横に2房後ろに4房の計8房に束ね

赤地に白抜で蛇の紋様が飾られた袴のみを身につけ

蛇のように細く切れ長な、赤い瞳に黒く染まつた白目を持つその男は山の麓にある人里へ視線を向けると周囲に跪き控えていた配下である数多の魑魅魍魎達に其方を見る

こと無く言葉を発した

「…余の天下を崩さんとする者がまた現れたようだ

いつも通りに…殺し、壊し、そして蹂躪せよ」

その号令を聞いた配下達は大声で吠えると主の命を叶えるべく人里へと一斉に移動を始めた

「数多の英雄、数多の神靈を従えし人の子共よ…

貴様らの思い通りにはさせぬ…我が世は終わらせぬ…！」

余に反乱せし彼の者共と共に…

我が軍、我が威を以て滅ぼしてやろう…！」

そしてそれを眺めながら鳥居に腰掛けたその男は片手に持っていた酒が注がれた盃を傾けながら口を開くのだつた

永久輪廻神域・出雲
修復開始

第一節『日本神話の地にて』

カルデアからのレイシフトしてきたマシユと立花

2人は辺りを見渡し今回のレイシフト先がとある集落から程良く離れた街道沿いで
あると確認しながら口を開いた

「レイシフト完了、特異点に到着しましたマスター」

「うん、まずは情報収集からだね」

そう言つて街道を歩き始めようとした2人の元にカルデアにいるダヴィンチからの
通信が入ってきた

『やあ2人とも無事に着いたみたいだね、さつそくで悪いけど報告だよ

そこから少し離れた位置で動体反応を感じした、どうやら戦闘が起きているみたい
だ』

ダヴィンチが通信越しにそう告げると、タイミング良く視界の先にある丘の向こうで
土煙が上がった

それを見た2人は互いに見合い頷き合うと同時に走り出しその現場へと向かつて
行つた

丘から下を見下ろすと一対多の戦いが起きていた

片やこの時代に即した刀剣で武装した兵士

片や歩兵用の鎧を着込み、刀剣や槍、弓矢で軽く武装した楕円2つと四角で出来た
なんとも言えない顔の人形の軍団

始めこそ善戦していた武士達も、続々と襲い掛かる人形達の勢いに圧され初めついに劣勢に立たされてしまった

そして体勢を崩した武士に人形の凶刃が迫るのを間一髪、合間に入ったマシユの盾がその刃を受け止めた

「ツ：マシユ、人形達を殲滅するよ！」

「了解ですマスター！ 戰闘開始します！」

それに驚いた様子で止まつた人形の動きを逃さず盾を振るい人形を破壊したマシユ、そのまま盾を叩きつけ殴り振り抜いて殴り飛ばし人形を一体残らず倒すと戦闘で張つた緊張の糸を緩めながら口を開いた

「残敵無し、戦闘終了します：お疲れさまですマスター」

「うん、マシユもお疲れさま」

汗を拭いつつ互いに笑い合い労いあう2人、そんな2人に助けられた兵士が声を掛け

てきた

「そこの方々、助太刀感謝する…

お陰で生き延びる事が出来た、何か礼をしたいのだが…何が良いだろうか?」

「どうか気にしないでください、私達が勝手にしたことなので

それよりも…実は今この地で何が起きているのか知らないんです

なので情報を集めたくて…良ければ人里まで案内を頼めますか?」

「む、邪馬台国の者でありながらこの地に何が起きたか知らないとはまた不思議な…どれほど田舎に住んでいたのだ?

…まあ良い、深追いはしないでおこう

承つた、しかと人里まで案内しよう」

頭を下げて感謝を伝える兵士を見てこれは好機とばかりに案内を頼む立花、そしてその頼みに頭を上げながら疑問を溢しつつも快く応じた兵士

2人は握手すると人里に向かつて歩き出したのだつた

第二節 『集落での出会い』

30分程をかけて荒れた道を歩き続けていた一行、やがて丸太をくみ上げた高い壁や杭、折れた槍などで囲われた集落に辿り着くと案内してくれた兵士が高くそびえる門の上にいた門番に向かい声をあげた

「ただいま戻つた、門を開けてくれ！」

「後ろの者は何者だ！」

「人形兵に襲われた所を助太刀して貰つた！」

「妖の類では無いと私が保証しよう！」

そう言うとしばらく門番が立花とマシユの二人を眺め、怪しい者では無いと判断されたか中に一言二言叫ぶと門が開いていく

そして促され急ぎ入った中では兵士達が門の外を警戒こそしているが人々が貧しいながらに幸せそうに暮らしていた

「とりあえず…落ち着ける場所に来れたね」

「はい、あとは…誰からこの場所の事を聞ければ良いんですが」

特異点到着から今まで気を張りっぱなしだった二人が一息付きつつ辺りを見渡して

いると、人々の奥から最低限の甲冑を身につけ髪を1つに縛り、腰に刀を刺した青年がやつてきて道案内してくれた兵士に声をかけた

「ようおっちゃん、人形兵の大軍に襲われたんだって？」

「大変だつたなあ、怪我は無い？」

「うむ、そこにある一人のおかげでな……

しかし少々装備が痛んでしまった……これで暫くは出ることは出来ん
しばらくは休養に当てることにする」

そう言つて兵舎らしき建物に向かつていく兵士を見送つた青年は二人に向かい合うと前置きも無く切り出した

「あんたらだろ、かるであ……のマスターとサーヴァントってのは

ついてきな、こここの情報教えてやるからさ」

「な、なぜ私達がカルデアから來たと……！」

「うん、まだカルデアの名前は出してないのに」

そう言つて歩き出した青年の後を追いつつ問い合わせた二人、すると青年は歩き続けな

がら答えた

「俺もサーヴァントだからここが特異点なのは知つてたし……

占い得意な仲間から今日かるであるマスターが来るつて聞いてたからな」

「なるほど…納得です」

取り敢えずは理由が分かり再度抱いた警戒を薄める二人、すると今度はふとある疑問が浮かんできた

「ねえ、いま自分はサーヴァントだつて言つてたけど…」

「その、真名は…？」

「ああ、確かに真名も分からんサーヴァントを信用は出来ないよな」

そう言うと青年は一度足を止めて一人の方に振り返つた、そしてニットと笑うと――

「俺は吉備津彦命きびづひこのみこと、日ノ本の民なら…桃太郎つて名乗つた方が馴染み深いか?」

その日本で育つた者なら誰でも知つているであろう、あまりにも有名な真名を高らかに名乗るのだった

第三節 『合流、そして現状』

桃太郎：もとい吉備津彦に連れられ集落の中でも特に大きな建物に辿り着いたカルデアからの2人

扉代わりかのように垂れ下げる布を退かす吉備津彦に続き中に入るとそこにはたのは：

「おっ！ 戻ったか吉備津の旦那！」

それで…後ろにいるのが例の連中か？」

「ああ、その通りだ金の字

それと何度も言つてゐるけど、旦那つて呼ぶの止めてくれよ…」

「それは無理だな、草紙の元としても…鬼退治の先人としても頭は上がらねえさ」

輝くまでの金色の髪を束ね大きな鉢を担いだ6尺3寸近い偉丈夫：坂田金時その人
だつた

いつものやり取りなのか吉備津彦と話を終えると立花達に視線を向け歩み寄る金時

「初めまして…いや、それとも別のオレと会つたことあるか？」

まあ良いや、オレは坂田金時！

カルデアの事はだいたい聞いてるぜ、これからよろしくな大将！」

「フフッ…うん、こつちこそよろしく！」

そう言つて笑いながら挨拶する金時の、カルデアにいる彼と何ら変わらぬ笑顔にいつの間にか緊張していた体から力が抜けるのを感じる2人

そんな2人が適度に緊張が抜け挨拶を返したところで吉備津彦が声を掛けてきた
「この拠点には、本当はもう1人いるんだが…今は取り込み中だから後にでも挨拶してやつてくれ

さて、挨拶も済んだところで：この特異点の現状と今までの経緯を話そうか」

その言葉に空気が張り詰める中、吉備津彦は話し始めた。

「まずは経緯の方からだな、と言つても召喚前の事だから人伝に聞いただけなんだが：全ての始まりは凡そ半年前の新月の夜のこと

明らかに人間のものじやない、禍々しさを含んだ妖氣を纏う男が現れたらしい」

そう言いながら集落に住む人に書いて貰つたという、その時の一連の流れを記した絵巻を見せる吉備津彦

そこには真っ黒な狩衣に身を包み妖気のような黒い靄を体から溢れさせる男が描かれていた

「その男を見たとある男神が人間達は隠れるように言い：かつての戦利品である剣を手

にその男に向かつていった

そして両者は七日七晩に渡り闘い続けたが…最後にはその男神が敗れ食い殺された」
そのまま絵巻を先の場面へと進めて行くと剣を片手に持つ髭面の神が立ち向かう姿、
両者が剣や爪牙をぶつけ合い争う姿

そして：孤を描く口元を赤く濡らし高笑いする男とその足元に倒れ伏した男神が描
かれていた

「そして…それによつてより強大になつた男を滅すべく天より多数の神が降りて來た
が、その悉くが同じように食い殺されたらしい

そして…その後その男は配下となつた数多の妖魔に命じ國中の神社や祠、社を破壊し
尽くした

そして多数の神らしき者達の体が赤く染まり積み上げられた光景、そしてその横で多
種多様の妖魔達がたくさんの建物を破壊し、燃やし尽くし、跡形も無く暴れている姿が
描かれていた。

「そしてその男は自らを八重大禍神やえのおまがつかみと称し、これよりは己が日ノ本の唯一にして絶対の
神であると宣言した：

それ以来、禍神配下の妖魔があちらこちらで暴れ回り…点々と存在する人里の対応は
従順と叛逆で分かれている

時折この日ノ本から出ようとする者もいるが：そう言つた者達は禍神軍に捕らわれ、そして奴等の居城に連れ去られている」

最後に破壊された出雲大社の跡地に建てられた黒く禍禍しい城の絵を見せる吉備津彦

そしてこの特異点の成り立ちや経緯はこんなところだと絵巻を片しながら話し終えると、彼に代わり今度は金時が地図を広げながら話し始めた

「そんな中、オレ達召喚されたって訳だ

今この特異点はこの村を拠点に妖魔と鬪う俺達人間の英靈と人里の人間達…

そして俺等と同盟関係にある、ここから近い山中に拠点を構え禍神達の同行や情報を探る人外の英靈達…」

そう話しながら地図に2つの白い石を置いていく金時

そして最後にそれら2つの白石から離れた位置に黒い石を置き…

「そして最後に禍神の勢力…これらがにらみ合いを続けてる状態だ

規模としちゃオレ等二つを合わせて禍神軍とトントンつてどこか…ちよいと劣るぐらいか」

そう締めくくると特異点についての話が終わつた

そしてカルデアの2人がその情報を頭に刻み込んでいると吉備津彦が横から声をか

けてきた

「とりあえず…あんた達の次の目標はここだな

人外の英靈達の本陣…ここで禍神達の情報を得ると良い」

そう言つて地図に置かれた白石の1つを指差す吉備津彦

それに異論無いと頷いた2人は集落の防衛のため残らざるを得ないと言う吉備津彦
と金時と一時離れ目的地に向かつて歩み始めた

第三・五節 『陣中会議』

人里を出て道中妖魔に襲われつつも教えてもらつた人外の英靈達の本陣がある場所まで向かうカルデア一行

「あつ…例の城が見えてきましたねマスター」

そう声を上げたマシユが見あげる先、本来ならば出雲大社が建つその場所に城が建てられていた

漆黒の外見に蛇が絡み合つたかのような装飾が施された城、その禍禍しい姿を見ながらカルデア一行は歩みを再開した

その頃、出雲大社：もとい出雲城の中へと窓から1匹の鳥天狗が飛び込んできた
そのまま勢いを弱める事無く廊下を駆けていく

そして大きな妖力が渦巻く天守閣近くの一部屋に辿り着くとその場に跪き、上座に座り盃を傾ける禍神に向かい口を開いた

「哨戒よりの伝令を申し上げます！」

かねてより懸念されておりました異装の人間と盾を携えた人間を確認！

西方地区にて人間を襲つていた人形兵を散らし、人里に入つたとの事です!』

『そうか…やはり人形兵程度では、幾多の歪な時を在るべき姿に正した者等相手には止めにもならぬか…』

それで…幾程の人形兵が散つた?』

「ははっ、報告ではおよそ50体程度との事!」

『そうか…やはり人間共とは一線を画する強さのようだな』

顔を覰める禍神、そんな男の横に座つていた小柄な影がケラケラ笑いながら口を開いた

「別にいくら人形兵が散ろうと構へんやろ?」

素体も山ほどあるし中身もその辺歩けば獲れるさかい
どうせすぐに補充も復活も出来るもんなんあ?』

「お控えくださいませお姫様!」

今は禍神様がお話になられて いるでありますよ!』

「あらあら、怖あいのに怒られてもうたわあ

「ここは大人しく引き下がるさかい、堪忍なあ」

そんな彼女が丁度対面に座つていた1つ目の大きな影に諫められ引き下がると、今度はその影が禍神の方を向くと問い合わせた

「はてさて、如何なさりますか禍神様!!」

その言葉にまた盃を傾けながら答える禍神

『どうもせん、十把一絡げの人形兵が散らされた程度…どうという事も無い

各地の首共にもそう伝えよ』

「ははあつ！」

禍神の命に答えた鳥天狗、するとそのまま窓から飛び去つていった
それを見送った禍神、するとその手に一振りの剣を顕現させながら一つ目の影へと言葉を掛けた

『タタラ…余の分け身、尾を預ける…』

「な、なんですとつ…!?」

『余が言わんとすることは…わかるな』

その問い合わせに歓喜に震えながらその場で平伏した1つ目の影…改めタタラ
そして禍神より剣を受け取ると自らの鍛冶場へと駆けていった

番外編

『バレンタインシナリオ』

2月になりあちらこちらでチョコレートが飛び交う日のカルデア
そんなカルデアの中を歩く立香は食道の隅で盃を傾けていたある人物を見付けると
駆けよつていった。

「大蛇様、此方をどうぞ！」

そう言つてロツクオンチョコをその人物：

つい最近発生した特異点で対峙し、その特異点の解決後に召喚されたばかりのサー
ヴァント八岐大蛇に差し出した

「これは…確かに猪口齧糖ちょくさいとうとか言う外とつ国の菓子か

貴様が余に供物なぞ…どういった風の吹き回しだ？」
「供物とかそんな大仰な物じや無いです！」

これから仲間としてよろしくつて言う：お近づきと親愛の証です！」

怪訝そうな顔をしつつ受け取る大蛇の言葉に邪氣の無い顔で答える立香
すると大蛇は呆気に取られたような顔になつたかと思うと笑い出した

「ククツ…クツハツハツハツ！」

邪神たる余によもや親愛とはな…！

前代未聞の不敬者、空前絶後の恐れ知らずであるな貴様は！
ここまで愉快なのは久方ぶりよ！

良かろう…この親愛の証は受け取ろうぞ」

そう言いながらチヨコレートを懷にしまい込む大蛇

そして頸に手を当てつつ考えこみ始めた

「さて、余は邪神と言えど理性無き獸では無い…」

親愛の証を捧げられたとあれば…返礼をせねば礼儀に反するというものよな
ふむ…用意をしてくるゆえ、しばし私室で待つていろ」

そう言つてその場を去る大蛇、その姿を見つつ立香は私室に戻つていった

【數十分後】

「受け取れ、これが余からの返礼の品よ」

部屋に入るなりそう言つて放られた瓢箪を受け止める立香

恐る恐る栓を抜き嗅いでみると…いつも八岐大蛇が纏う匂いが漂つてきていた

「これつてもしかして…お酒？」

「案ずるな、酒精は抜いてある…」
アルコール

まあ我が娘達はそのままで良いと言うてはいたが：そういう訳ににもいくまいよ」

そう言いながら腰に下げた瓢箪から同じ匂いの酒を煽り飲む大蛇

「でもこの匂い：酒呑童子や伊吹童子が呑んでるのとは違うような気がするんだけど

…」

「余と共に現界した酒なのだ、余に纏わる酒など決まっていよう

それこそ我が死因の一端、八塩折酒やしおりのさけよ：味を似せただけの模造品だがな
 飲むなり厨の連中に使わせるなり、好きに扱え」

そう言い残しながら背を向けた大蛇、そんな大蛇に立香は声を掛けた

「あれ、何処に行くの？」

「…柄にもない事をしたせいで酔いが醒めてしまつた、食堂で飲み直す」

「そつか、プレゼントありがとうね大蛇さま！」

その言葉を聞いた大蛇は立香の方を一瞥する事もなくその場を去つて行つた

所変わつて食堂にて、いつものようにお酒を飲んでいた伊吹童子

彼女は近付いてくる己の父親の様子がいつもと違う事に気が付くと其方を向きつ

問い合わせた

「あらあパパ、どうかしたの？」

随分と機嫌が良いみたいだけど？」

「いや、大したことではない：」

ただ：面白いと思つただけのことよ」

そう言いながら伊吹童子の対面に座る大蛇

分からずに首を傾げる娘の前で笑いつつ盃を傾けるのだった

余は邪神であつた

余は人に仇成す者であつた

余は人に害ある者であつた

余は人を食つた、余は人を殺めた

余に祈る者もいた、余を崇める者もいた

余を怖れる者も、余を憎み厭う者もいた

その末に古今東西に語られる物語のように：

善なる者に討たれた

真実は討たれたように見せ逃げ延びたとは言えども：

余の支配は終わりを告げた

その先で余は愛する者を得た、護るべき者を得た、誰かを愛する事を知つた
そして我が子を腕に抱きまた逃げ延び…

そしてその生を終えた

だが後の世で…この当世で余は奴に討たれて死んだと語られる

人に仇成し害を成し、血も涙も無き怪物として語られる…その事自体は構わない
事実、余はそのような存在として神生(じんせい)の大半を生きていた

ここにいるあらゆる者が余に向ける…疑心や嫌悪の混ざった悪しき者を見る目も当たり前であると受け入れていた

「だがそんな余に疑心も、嫌悪も、恐れも無く…」

目の前に立つ者を見るような目を向け…ただ純粹な親愛と感謝を向ける者がいるとは思わなんだ

本当に…サードアントという在り方は面白いものよ」